

〈研究〉深川の木場について

大柴, 寿美枝

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

14

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

1956-05-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026562>

出来ず最近の時代における特殊な気候環境の下で形成されたものであろう。
今後花崗岩地域の地形調査においては、この火山層および押出しの研究が重要な課題をなすものである。(1956. 4. 12)

参 考 文 献

- (1) 今村孝郎, 井上春雄: 秩父山地の地形学的研究 地理学年報
I 1933
- (2) 阿山俊雄: 飯能附近の山麓面 日本地誌学 I 1942
- (3) 藤本治義: 関東地方(地方地質誌) 朝倉書店 1953

深川の木場について

大 柴 寿 美 枝

1. 序

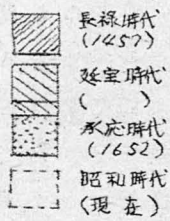
「木場」といって誰れしもが一樣に「材木を置く所か、或は、材木屋さんの又山ある街なのか」と材木の街を想像する事だろう。これは、木場の名稱からして容易に判断の出来る事で全くこの通り、琴川の木場に行つてみると新並に材木問屋と云う看板が掛けてあり、附近には大きな貯水池などもあり、また製材工場もそこそこみられる、広い面には、トラックがむつさり新しい材木を積んで往來している。こんな処が深川の木場なのである。

では、この木場に、いつ頃から、どうしてこの様に材木が集められることになつたのか、また琴川という立地条件との関係、他の産業との関連性など木場の存在について少し述べてみたいと思う。

2. 木場の厂史的変遷

木場の創生と変遷とを端的にいえば、江戸の厂史と共にあつたといつてもよい。もつとも厳密な江戸の厂史は今から490有余年前の長祿元年(1457年)に今の東京の礎石が据えられた事になつている。すなわち後花園天皇の代り関東官領上杉定正の家臣、太田道灌が、関東、奥羽の咽喉にあたり水陸交通の便を兼ねた要勝の地であることを発見し、長祿元年々月武蔵野の一角に江戸城を構築したのであるが、道灌の死去30年、次第に繁栄して関東の要の市街となつた。その後道灌の死後上杉氏は北條氏に敗れて江戸の繁栄は小田原に移り天正18年8月(1590年)徳川家康が関東八州の領主として江戸に居城を定めるまで死んだとされていたが慶長18年(1613年)

7/ 圖



家康が征夷大將軍に仕せられ、に幕府を開いてからというのが妥当であらう。

ところが木場、すなわち東京における材木問屋の発生はこの家康の江戸城構築に端を発したものである。この当時の深川はというと古利根川と隅田川に挟まれた広大な三角洲がその両河の水流がこれを浸し、更にしばしば、江戸の中央に及んだ当時において家康は江戸開拓に治水工事を重要政策の一つとして行つた。しかるに江戸は、浅良川、古利根川により数回の水害に見舞われ深川は一望果しなき荒蕪の地であり人家もない水郷であつた。この深川の発展の元ノは頼澤国から渡つて来た森孫右衛門が魚師30余名を率いてこの地に来り、並海の漁撈を業としたのでこの地は漁師町として栄えた。その後この深川は魚屋、青物問屋が増え半農半漁町として江戸市中に食糧を供給する所になつた。この後、江戸構築に際し、駿河、遠州、三河、尾張、伊勢の諸国から必要な材木の伐り出し、集荷に努力したものが慶長ノノ年（1613年）に築城竣工後その功に依り府内に留つて材木商を爲す事を許されて、に始めて集団的に移り住み営業をなした。

最初は府内日本橋材木町辺一帯であつたがそこが火災にあい、その後深川に移されたものといわれている。当時は幕府に多額の寄附金を支払はなければ営業が許されなかつた。

その後、深川が材木問屋らしき様相となつたのは明治年代で、この頃は四通八達の溝が設けられ、そこ、ここに貯水地も完成された。明治5年、新橋—横浜間に鉄道が開通されてからは次第に交通が便利となり明治27年には上野、青森に日本鉄道会社が鉄道を設けた際に、材木は東北地方からもどんどん出荷される様になつた。そして木場は日増に繁栄した。こうなると材木の扱う量も多くなるにつれ問屋制度の規定は厳格になり営業許可証は必ずかくなり木場内での問屋の数は限定される様になつた。

大正の初期頃はあまり変化もなかつたが、大正ノス年になつて関東大震災の折、この地も一瞬にして灰塵となつたが、地方に産地をもつている関係上その復興は非常に早く、東京の復興に大きな役割を果たした。

昭和に入つて、特に今沢大戦中は、物価統制に依り、材木もその枠中に入り問屋の営業は一応中断状況になつた。戦後も統制の枠は徹廃されず、昭和25年にようやく大戦前のような自由市場が見られる所に至つた。

3. 東京の低地帯の立地利用

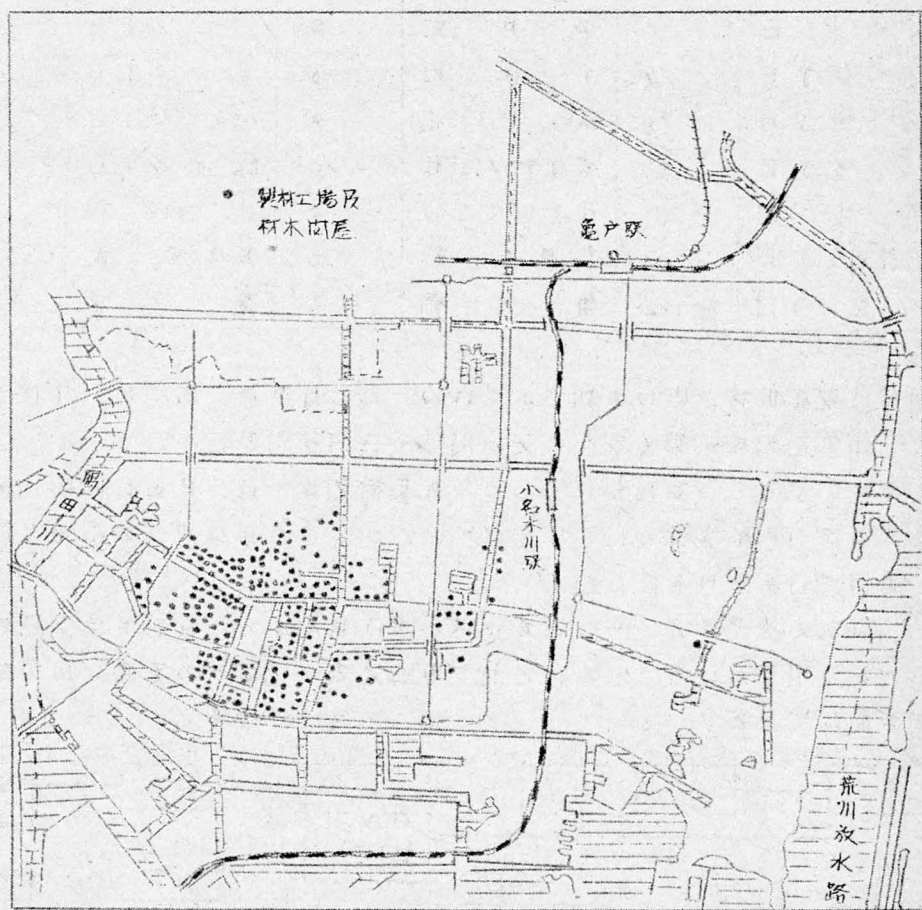
木場が創生の頃より年々その集荷する材木の量を増加し、消費市場に供給の大きな役目を果しているのは木場の持つ立地の大きな役割とも考察出来る。

すなわち荒川のもつ地形の特徴は、現在でも一見図上で観察出来る。それは荒川放水路と隅田川に挟まれた瓢箪形の地域の隅を中心から真横に切った下半分が、南方は東京湾に面し、大きな荒川のデルタとにあつて「地下一尺遙れは水が湧く」という様な低平な地で荒川放水路と隅田川をつなぐ運河が数条に設けられている。これが木場には至極便利な自然條件の利用で、これらがことごとく水運に効し、材木を筏に組んで流すのに、或は貯水地の利用にされている。

ㄨ 現在の木場の実態

(1) 同屋の分布、分類——材木同屋の分布は木場の発展の中で、たえず拡張されたり収縮したりしている。現在の同屋が存在する範囲は文の図の通りである。

オ乙図 材木同屋及製材工場分布図



これを町目別にしたものがアノ表である。

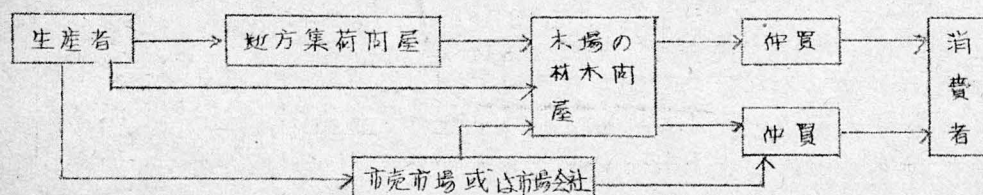
アノ表 東京木材肉屋組合に加入している肉屋数

町 名	業者数	町 名	業者数	町 名	業者数
江 東 区 深 川	(計)399	平 野 町 3 町 目	19	龜 戸	2
富 岡 町 / 町 目	1	“ 4 町 目	7	墨 田 区 内 の も の (計) 74	
門 前 仲 町	1	清 澄 町	2	菊 川 町 3 丁 目	20
牡 丹 町	1	三 好 町 / 丁 目	1	整 川 / 丁 目	2
豊 島	1	“ 2 丁 目	2	“ 2 丁 目	1
富 岡 町 2 町 目	27	“ 3 丁 目	6	“ 3 丁 目	1
深 川 / 丁 目	3	“ 4 丁 目	3	“ 4 丁 目	10
“ 2 丁 目	10	白 河 町 4 丁 目	2	柳 原 町	17
冬 木 町	55	東 陽 町	2	江 東 橋	10
木 場 / 丁 目	2	平 井 町	9	“ 2 丁 目	2
“ 2 丁 目	29	千 石 町	8	“ 3 丁 目	1
“ 3 丁 目	10	扇 町	1	“ 4 丁 目	1
“ 4 丁 目	27	築 江 町 / 丁 目	10	緑 町 4 丁 目	3
豊 住 町	5	住 吉 町 / 丁 目	5	東 両 国	2
平 野 町 / 丁 目	17	高 橋 5 丁 目	10	大 平 町	1
“ 2 丁 目	42	新 大 橋	2	鹿 橋	1

肉屋は現在販材に依り大別されている。即ち針葉樹、広葉樹、外材に分けると、針葉樹肉屋が最も多く、製品肉屋又は羽柄肉屋と呼んでいる。この他にも産林肉屋と云う材種分けもある。針葉樹関係では、秋田材肉屋、新宮材肉屋、天龍材肉屋等産地により分けているが、この様な地域の商品を扱う店が木場内ではあまり多くない。

(四) 材木の流通経路——ここで述べる事は材木がどの様な流通経路のもとに山地より消費者に渡されるかと言う事である。先づその経路を図に示すと下記の通りである。

ア3図 材木の流通経路



(注) 生産者は山地林産家、消費者は土木請負業者、大工等も含む。

木場の岡屋の仕入方法は山地生産者に依る仕入が多い。これは木場の岡屋の伝統的なもので、地方にも集荷岡屋はあるがその数も少なく利用の度合はあまり多くない。それは木場の岡屋は何と云つても地方出身者が多いので出身地の林産家との直接取引が多く、又岡屋内には私有林をもつて自分の材木を販売している者もいる。次に岡屋と仲買との関係についてみると岡屋は仲買を相手に卸すのが通常で仲買と岡屋の区別は木場の創生の頃より明確となっている。即ち岡屋制度は徳川幕府の封建的封鎖経済に於ける経済統制の一策であつた。であるから岡屋を営むには従て幕府の許可を必要として、材木岡屋も仲買も、共に材木を業として生活していたのであるが延宝元年(1679年)に山方直仕切の件で両者の間にいざこざがあり、江戸町奉行前に訴があり、その判決の結果「村内(江戸市中)諸匠への用産を余するものをもつて仲買とし、山地直仕切りを営む者をもつて岡屋とする」とした。この後は両者の営業目的が定まり、今日でもその例にならつてゐるが、岡屋でも資本が盛細で山方直仕切りは少なく、消費者に販売している者もあり、仲買の中にも手広く営業をして産地直接取引をしている者もあられる。

(イ) 原木岡屋について——原木岡屋は素材岡屋とも呼ばれている。木場内では「東京原木協同組合」を組織している。この組合の加入者は30名余りであるが、この中製材業者、切挽業者が6割で残りの4割が原木を専向とする者である。木場内にこの採に原木業者が少いのは

(1) 近年になつて原木の需要量が減じ製材したものが多く使用される様になつた。

(2) 原木を扱うのは、製材品を扱うより至難を必要とするので、新しく原木岡屋を始める者があまりない。

(3) 輸送の合理性に欠けているので、生産地で多量の原木を製材して出荷している事などが考えられる。原木では、木曽ヒノキ、秋田スギ、土佐スギ等高級官材が扱われ一般原木はあまりない。

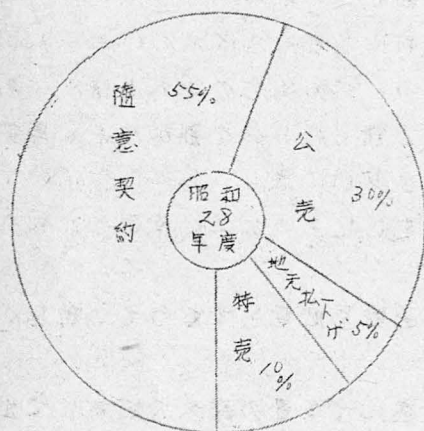
(ロ) 外材について——南洋材、米材が主なもので、ビルマ、ボルネオ、フィリッピン、などから南洋チーク材を輸入し、米国から米杉を輸入している。尚、ソ連材は近年(昭和29年)製函用として少量の輸入があつた。これらの外材は、木場の岡屋では直接扱うものではなく大部分が三井、三菱などの大資本系の商社が一手に輸入し、木場内に卸している。

(ハ) 市売市場制度——この制度が木場内に見かける様になつたのは、朝鮮

動乱後の事で元素は大阪の材木業者の間で行はれていた。しかるに最近では本家の大阪より東京の市売市場会社の方が活況を呈し、年商を通じても扱う量にはるかに多くなつて来た。市売市場制度の特徴は、金融面が円滑な事、取引が開放的である事、出荷主の現任受取りが早いことなのである。

5. 産地の実態と木場の両屋

材木の産地は我が国に於ては、殆んどが山地である事は周知の通りである。我が国の山地の森産は国有林、民有林に大別出来る。国有林は国家の財産として管理されているもので、我が国、林野面積の3/4を占めている。その分布は、北海道、東北、中部、四国、九州に多く並發、中国には少ない。その位置も皆梁山脈を中心とする奥山岳地帯である。その為、社会的利用と云う問題は国民の生活に種々な検討の余地があるが、この問題は別として国有林からの年商に出荷される材木の量は約3500万石で林野庁の管轄の都道府に存する営林署が公売、特売及地元私下げの方法に依つて販売される。昭和28年夏の国有林の出荷販売は又々図の通りである。この図で取ると随時契



又々図 国有林の出荷販売

約が多いのは、両屋の資金面の引締めが一般的に世の中が不況になつて来たので材木の需要が少なくなつて来た影響も考えられる。

国有林の材木が木場内に入荷されるものは木場全体として約6%位で、大概は、大阪名古屋の市売に出荷されて販売されている。

民有林は、中国、並發、東海地方に多く、これを更に、公有林、社寺有林、私有林に細別される。民有林の林産資源は優良林業地帯を除いては極めて貧弱で産出される材木の出荷量も少なく

国有林の半分乃至3分の1位である。民有林中特に私有林に於ては、地方に在住する山林家が出荷するので、大抵の場合この人達は自己資本で製材工場を営営しているので、製品として集荷両屋に、販売されるか、又は地親製材工場に販売するので地方の中小都市の需要に供給をしている。

尚残余のある場合は、大阪、名古屋の市場に出荷されるか、或は一まとめにされて東京に出される。

次に産地を素材の出荷と、製材品の出荷別にみると、次の様な特徴が見られる。

- (1) 素材の出荷量が近年減つてゐるのは、地方に製材工場が発達した爲である。
- (2) 素材の果別の出荷量は国有林の分布状態にほぼ等しい。
- (3) 中部地方の素材出荷縣は大体の場合、名古屋の製材工場に出荷されている。
- (4) 名古屋は素材を移入して製材として移出している。
- (5) 製材品を出荷している著名な果は、東北部では秋田、中部では静岡、近畿では和歌山であるが、これ等の果はいづれも山地で採集した原木を秋田では米代川、静岡では天龍川、和歌山では熊野川、吉野川に依つてそれぞれ流送し、河口或に於て集荷、製材をして、消費地へ出荷している。尚鉄道に依る製山地の搬出しはトロツコを利用するが、河川にて流送する量も極めて多い。

6. 木場に集められる材木

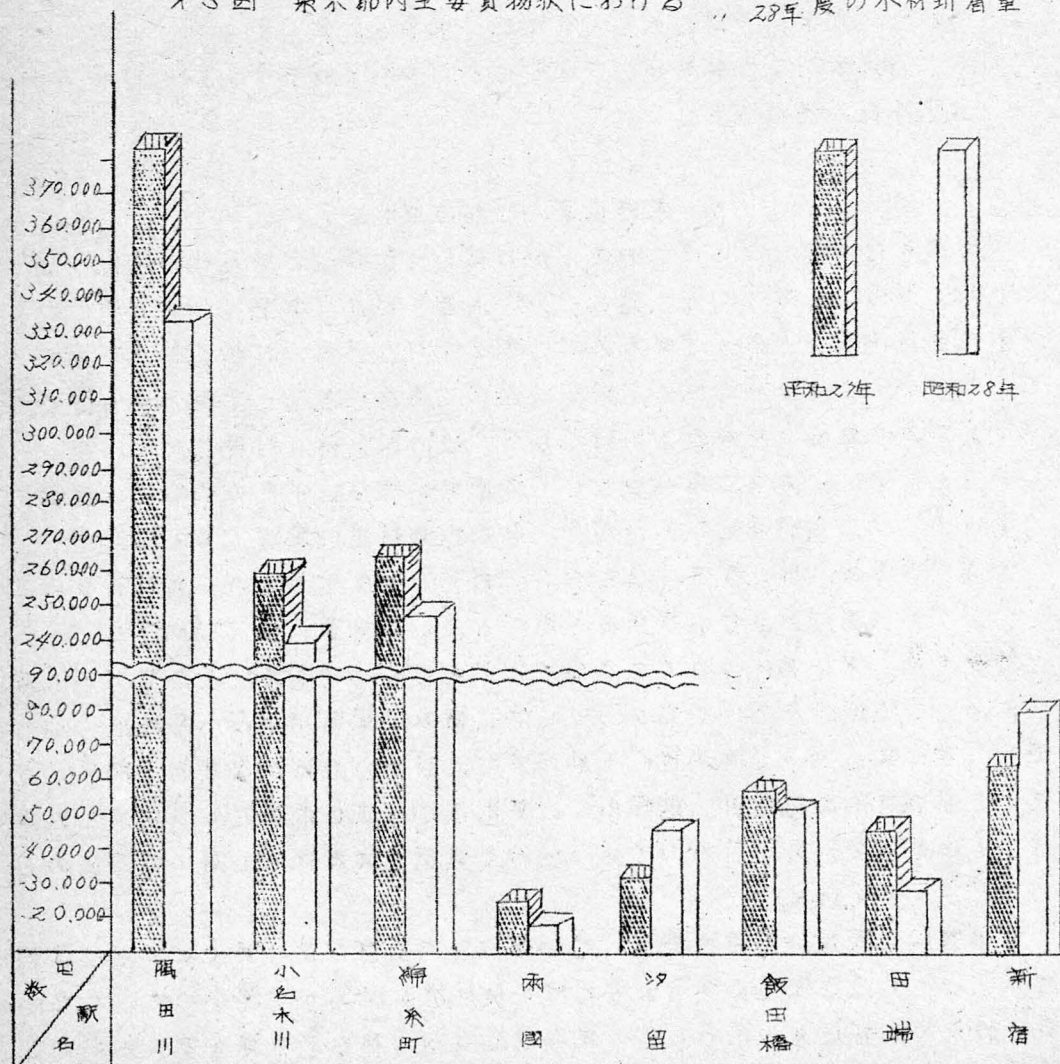
木場の性格が過去の「材木の街」から転じて近頃は市場会社の進出により「材木の市場」に変わつて來た傾向もみられる。それは市況市場に出荷される材木は全国各地から集つて來るので、種々様々な材木の種類となつてゐる。又、木場から移入される所も、東京以外の、各県に多量に出荷されてゐるので、並順の木場は、材木の集散地として、その取引が重要視されている。この様に木場が、材木の集散地としての傾向が濃くなるにつには交通の発達にともなつて起つた現象ともみられる。即ち木場創生の頃は、木場を開拓した人達は関西の人が多く集つていたので、自分の出身地のものを扱う習慣があつたので、木場に入る材木も関西方面のものしか見受けられなかつた。當時は紀州、伊勢あたりのものは船で江戸までもつて來て現在の隅田川の河口にあたる銚子州あたりで船から下し筏に積み、隅田川から小名木川、仙台堀川、鹽川等に入つて貯水池に入れられた。明治の始め頃は日光、秩父、上越、方面の材木は利根川、鬼怒川、江戸川などを流し木場に入つた。この頃は、もっぱら河川の利用のみであつたので集荷される材木も河川の流域のものと限定されてゐた。

明治末期に鉄道が急速に発達してからは、関西材になり東北材が主に集荷された。この頃は鉄道の運賃が安く船賃の方がはるかに高かつた。木場に東北材が入る様になるにつれて、関西材は大阪、神戸と市場を変える様にな

つた。

しかるに終戦後は東京の復興に、どうしても大量の材木を必要とした爲、東北材だけでは、どうていまにあわず、関西、北陸など、いづれを問わず水陸両方面を通じ、木場内に材木を流し込み集荷をする結果となつた。それが今日迄引き続き各県の各種の林木が集荷されている。(県別集荷量図略す)ところで大量の材木を受け入れる東京郡内の貨物駅は、郡内8ヶ所中、最も水陸両方面の立地を利用した。ターミナル、ステーションの隅田駅がその位で、材木は年間に約30万屯以上でその大部分は製材品でその9割強がトラックで木場に輸送されている。

第5図 東京郡内主要貨物駅における昭和27年度と昭和28年度の木材到着量



原木も、貨車から下ろされ、隅田川を筏に組み、木場まで流されるのである。次に多いのは、小名木川駅と錦糸町駅で、これは両者とも木場に並い貨物駅としてそれぞれ特徴がある。尚、各駅の材木到着量は次の通りである。

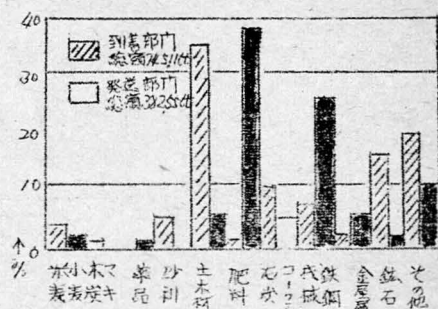
〔参考〕錦糸町駅における到着物分類表〔表2図〕

〔参考〕小名木川駅における主要品到着発送状況〔表6図〕

表 2

昭和27年	%	昭和28年	%
材 木	58.5%	材 木	55.9
鉄 鋼	8.2	鉄 鋼	9.6
石 炭	4.8	石 炭	2.9
薪 炭	4.7	薪 炭	3.6
食 糧 品	2.9	食 糧 品	4.4
工業薬品	3.4	工業薬品	4.1
珪 砂	5.0	珪 砂	5.1
その他	12.5	その他	15.5

主要品到着発送状況(小名木川駅 昭和27年度)



この他、木場に集つて来る材木は外材として、アメリカの大平洋岸及カナダ、から米杉、ホルネオ、マライ、フィリッピンからチーク材が輸入されるがこれ等は殆んど原木である。

7. 木場内にみられる関連産業

- イ) 製材工場(省略)
- ロ) 川並について(省略)
- ハ) 木炭(省略)

8. むすび

荒川の木場とは、「材木の街」から「材木の市場」に転じた新しい産業の地である。しかるにこの街には江戸500年の歴史と共に流れる伝統が一脈通じ、ヒえず新しい時代の中で格式をもつて地域的企業を営んでいる。私の調査や研究とは、この木場内のほんの一隅を針で刺した程度のもので、こゝで結論を出そうとする事さえ困難である。

しかしこの論文の終りに、今迄述べて来た事からして、見出されるものは荒川の地形が木場の発展に重要な役割をしめている事で今後もこの「材木の市場」に大きな繁栄をもたらすのではないだろうか。以上(1956.4.15)

参 考 文 献

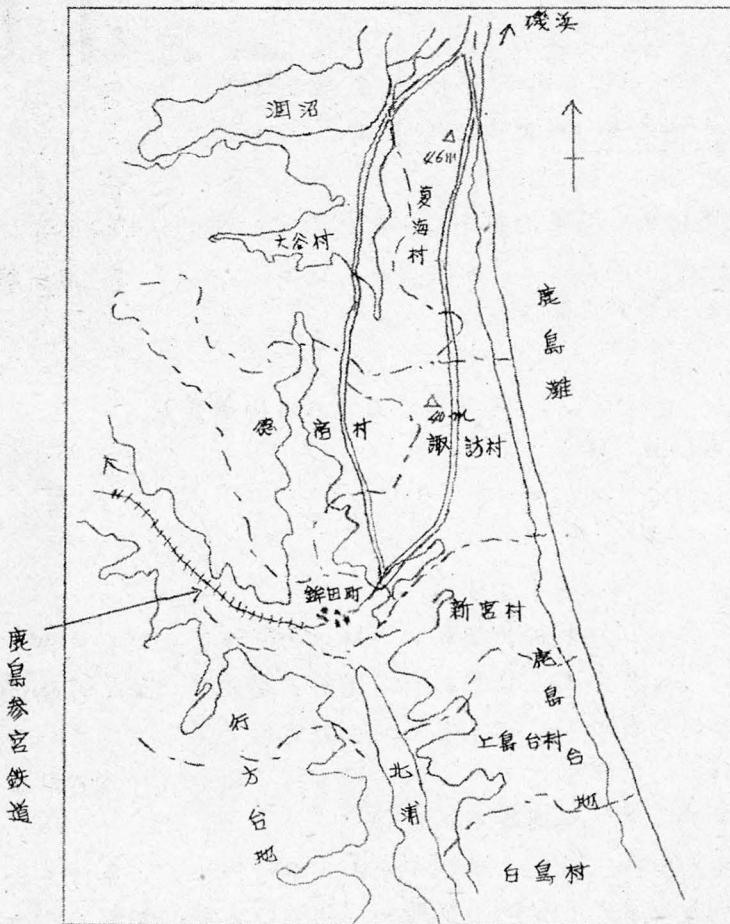
- | | |
|---------------|-------------|
| (1) 材木の取引 | 東京材木問屋協同組合編 |
| (2) 木場 | 東京材木問屋協同組合編 |
| (3) 深川区史(上、下) | 東京市深川区編 |
| (4) 日本の森林資源問題 | 三好三十郎著 |
| (5) 森林物資統計資料 | 農林省林野庁 |
| (6) 林業工業について | 木材新聞社編 |
| (7) 東京営林局月報 | 東京営林局発行 |

茨城県鹿台地北部における

農業の経済地理学的一考察

— 甘藷卓越地としての性格 —

中 村 泉 敏



一四 鹿島台地北部概図